

**令和6年度**

**第13回大垣市中学生**

**ドイツ・シュツットガルト市研修派遣 報告書**



派遣期間: 2024年9月19日～9月27日



## 第13回大垣市中学生ドイツ・シュツットガルト市研修派遣事業

### 団員名簿（学年・五十音順）

派遣期間：令和6年9月19日（木）～9月27日（金）

No.	役名	名前	学校名 役職名もしくは学年
1	団長	とみだ やすひと 富田 泰仁	大垣市立北中学校校長
2	総務兼通訳	すずき ゆうさく 鈴木 勇作	大垣市立東中学校教諭
3	総務	こたけ ひでき 小竹 英紀	（公財）大垣国際交流協会
4	団員	いとう かすみ 伊藤 加純	大垣市立南中学校1年
5	団員	あおき あやか 青木 彩華	大垣市・安八郡安八町組合立東安中学校2年
6	団員	いとう けい 伊藤 慧	大垣市立南中学校2年
7	団員	かのう あかり 加納 あかり	大垣市立星和中学校2年
8	団員	まつおか こう 松岡 昊	大垣市立江並中学校2年
9	団員	みわ ゆき 三輪 有希	大垣市立西中学校2年
10	団員	えんどう けんじろう 遠藤 賢志郎	大垣市立北中学校3年
11	団員	ひぐち めのう 樋口 惠濃	大垣市立東中学校3年
12	団員	やすだ ももか 安田 百花	大垣市立東中学校3年
13	団員	よしだ あん 吉田 杏	大垣市立南中学校3年

## 第 13 回 大垣市中学生ドイツ・シュツットガルト市研修派遣 日程表

	月 日	現地時間	交通機関	日 程
1	9 月 19 日 (木)	13:45 14:11 15:06 17:30 18:30	JR 東海道線 東海道新幹線 京急本線	大垣駅集合 大垣駅発(JR東海道線)⇒ 名古屋駅着(14:44) 名古屋駅発(のぞみ 226 号)⇒ 品川駅着(16:39) 品川駅発(京急本線)⇒ 羽田空港第 3 ターミナル駅 羽田空港周辺ホテルへ 羽田空港ターミナル内で夕食  【ホテル泊(羽田空港周辺)】
2	9 月 20 日 (金)	7:30 9:40 17:00	ルフトハンザ航空(LH715) 貸切バス	ホテル発 羽田空港発(ミュンヘン空港へ) ミュンヘン空港着 到着後、旅行会社手配バスにてホテルへ 夕食  【ホテル泊(ミュンヘン)】
3	9 月 21 日 (土)	9:00 9:30-14:00 14:00 17:30	貸切バス 徒歩 貸切バス	ホテル発 ミュンヘン施設見学 (レジデンツ博物館、マリエン広場など) ミュンヘンを出発しシュツットガルトへ シュツットガルト到着しホストファミリーと対面  【ホームステイ①】
4	9 月 22 日 (日)	終日		《シュツットガルト市プログラム》 ホストファミリープログラム  【ホームステイ②】
5	9 月 23 日 (月)	午前中 12:00 13:00	電車	《シュツットガルト市プログラム》 学校見学・授業体験(ホストフレンドの学校を訪問) 昼食 ルードヴィヒスブルク城見学  【ホームステイ③】
6	9 月 24 日 (火)	8:30 9:30 12:00 14:30 17:00	電車 徒歩 電車	《シュツットガルト市プログラム》 シュツットガルト中央駅集合(電車でチュービンゲンへ) チュービンゲン市内見学 昼食 ネッカー川下り(電車でシュツットガルトへ) シュツットガルト中央駅解散  【ホームステイ④】
7	9 月 25 日 (水)	9:30 10:00 12:00 18:00-20:00	徒歩 電車 ホストファミリー	《シュツットガルト市プログラム》 シュツットガルト市庁舎前集合 市庁舎訪問(その後市内見学) ホストフレンドと自由時間(昼食含む) お別れ会(ケーニギン・シャルロッテ高校にて)  【ホームステイ⑤】
8	9 月 26 日 (木)	7:30 9:45 10:30 12:40	ホストファミリー／電車 ルフトハンザ航空(LH2145) ルフトハンザ航空(LH714)	シュツットガルト空港集合 シュツットガルト空港発 ミュンヘン空港着 ミュンヘン空港発  【機内泊】
9	9 月 27 日 (金)	8:00 10:26 11:01 12:45 13:30	京急本線 東海道新幹線 JR 東海道線	羽田空港着 羽田空港第 3 ターミナル駅(京急本線)⇒ 品川駅 品川駅(のぞみ 339 号)⇒名古屋駅着(12:33) 名古屋駅(JR東海道線)⇒ 大垣駅(13:17) JR 大垣駅解散



## ドイツ・シュツットガルト研修から感じた「自信」と「感動」

団長（大垣市立北中学校 校長） 富田 泰仁

研修の目的について、団員10名の皆さんとの初めての会で、次のように聞きました。

明日の大垣市を担う少年少女たちをフレンドリーシティのドイツ・シュツットガルト市へ派遣し、現地の同世代の少年少女たちとの交流を深め、異なる文化・歴史・価値観などを学び合い、国際性豊かな人材の育成と、両市の友好の絆をさらに強くすること。

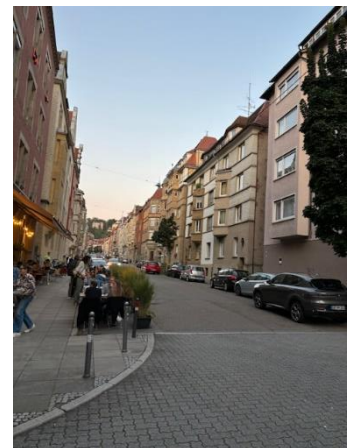
今こうして日本に帰ってきて思うのは「人は貴重な経験によって、ものすごいスピードで成長する」ということです。

研修最終日に、ホームステイ先の家族のみなさん、お世話になったケーニギン・シャルロッテ高校のみなさん、日本語教諭の井上百子先生をはじめとした現地のコーディネーターの方々とお別れ会をしました。団員一人一人が大垣の代表として、大垣の文化や伝統と特徴、日本の良さをクイズで紹介したり、カルタや福笑い、ソーラン節を披露したりして交流を深めました。団員は決して流暢にドイツ語を話した訳ではありません。しかしホストファミリーのみなさんは笑顔です。会全体が一緒に互いの文化を交流しようとする雰囲気には溢れていました。団長として会の最後に挨拶をさせていただきましたが、こんな話をしました。



シュツットガルトでみなさんに出会えたことを、とても嬉しく思っています。感謝しています。みなさんとお別れするのはとても寂しいです。みなさんとの出会いで学んだこと、シュツットガルトという街の素晴らしさ、ドイツの素晴らしさを、日本に帰ったら周りの人に必ず伝えたいと思います。日本には別れの挨拶として「さようなら」がありますが、この言葉だけだととても寂しくなるのでこの言葉を添えます。「また会いましょう」。

研修中、団員一人一人と話をしていく中で、印象的な言葉がありました。ある子は「言語がうまく話せなくても、伝えようとする気持ちや工夫によって何とかなるのだと分かりました。」と言いました。またある子は「正直私はコミュニケーションをとることが苦手です。自分から話しかけることなどできる自信がなかったけど、今は少しずつだけ自分から話をするできるようになりました。私の中では大きな進歩です。」と言いました。人と比べるのではなく自分の中の成長を実感し、きっかけを掴んだ団員はたくさんいます。



実際大人である私自身も、最初は異文化に触れたり地元の人々とコミュニケーションをとることに不安や勇気がいりました。しかし「自分を信じて行動すること」で育てる「自信」、「相手の思いを感じて行動にまで移すこと」で育てる「感動」によって、変わることができたと思います。大人の自分ですらそう思うのですから、10人の団員の皆さんの実感は計り知れないものがあると思っています。

今回の経験を本当に活かしていくためには、支えていただいた方々への感謝の気持ちを忘れず、自分の感じたことをできるだけ具体的に形にすることだと思います。体験を話すこと、見せることをスタートとして、故郷大垣や自分の将来への行動につなげていきたいです。

## 一生懸命は伝わる ～笑顔は世界の共通語～

総務兼通訳（大垣市立東中学校） 鈴木 勇作

「言葉の壁はあるけれど、一生懸命に伝える気持ちと、笑顔を大切にしていこう」これは私が団員たちに送った最初の言葉です。そして研修最終日、「これで、発表を終わります。ダンケシェーン。」事前に準備した『大垣紹介プレゼンテーション』、日本の伝統文化を伝えた『かるた』、『福笑い』、そして団員、ドイツの方々と一緒にすることができた『ソーラン節』と、全ての演目が終わり、笑顔を忘れず一生懸命にやり切った団員全員の満ち足りた表情は記憶に鮮明に残っています。

時はさかのぼり6月、私たちのドイツ・シュツットガルト市派遣研修はスタートしました。初めての顔合わせ。団員たちは皆、まだぎこちない雰囲気互いに自己紹介をしました。そんなぎこちない雰囲気を見て、「これから他国に行き、現地で知らない人と交流をしていくのに本当に大丈夫か？」と内心不安に思っていました。しかし、英語やドイツ語の勉強をしたり、出し物の練習をしたりしていく中で、互いにコミュニケーションを図り、「踊りの隊形をこうするともっと見ている人たちが見やすくなるよ。」や、「ドイツで有名なアニメを調べてそれをカルタや福笑いとして使えば、現地の人でも喜んでくれるんじゃない？」といった、自分達自身で活動を創り上げていこうとする自発的な動きがでてきました。



9月19日、いよいよドイツへ出発する日になりました。我々は14時間という長い渡航時間を終え、無事にドイツに到着しました。研修3日目、まだ時差ぼけや、長旅の疲れもある中、ホストファミリーと初めて対面しました。団員たちの中には、いよいよ研修が本格的に始まるというワクワク感でいっぱいの子供もいれば、緊張からなかなかホストファミリーに話しかけに行くことができないという者もいました。私は研修初日に感じたような不安が頭をよぎりました。しかし、その後の研修の中で、笑顔でホストファミリーと食事をしている姿、団員たちがなんとか自分の伝えたいことを一生懸命に伝えようとする姿を見て「この研修に来てよかった」と改めて思いました。

いよいよ研修最終日、自分たちの出し物を発表する日がやってきました。発表をする場には、受入れてくださった学校の校長先生、教頭先生をはじめとした先生方やホストファミリーを含め40名以上が集まりました。私自身、ドイツ語の司会に挑戦し、緊張をしている中でしたが、団員たちは終始、『笑顔』、『一生懸命に伝える気持ち』を忘れずに活動してくれました。言葉の壁でなかなか伝わり辛い部分もありましたが、団員たちのその姿勢がいつしかその会場にいた人たちを皆笑顔にしていました。最後には手拍子をしたり、一緒に踊ったりと会場が一体となる様子が伺えました。その会場にいる人たちは国籍、文化、習慣そしてマナーなどのそれぞれに異なるものをもっていますが、互いの国の文化や生活を尊重し合った真の国際交流がそこにはありました。



私たちはこれから、如何なる相手においても互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとし、共に助け合いながら生きていかなければなりません。団員たちにはこれからも、お互いの思いを一生懸命に伝え合う姿勢を大切に、どんな人たちとも手を取り合って笑顔で生きていける一人ひとりになることを願っています。

## ドイツ研修を終えて

公益財団法人大垣国際交流協会 小竹 英紀

今回の大垣市中学生ドイツ・シュツットガルト市研修派遣事業は1994年（平成6年）の初回から数えて13回目ですが、同市との交流はちょうど30年目の節目にあたります。新型コロナウイルス感染症の世界的拡大による中断を経て、今回ようやく派遣団を送ることができました。引率者を含む団員の海外派遣にあたっては、大垣市、大垣市教育委員会のご理解ご協力のもと準備を進め、出発までには4回の事前研修を重ねました。事前研修ではドイツ語と英語研修、大垣紹介のプレゼン等の準備のほか、国際人としての心構え等についても触れたほか、本研修はホストファミリーとの交流がなканずく重要なことであることから、団員に対しては現地で積極的なコミュニケーションを図るよう促しました。現地研修等とおして、住み慣れた日本を出て海外で生活することがどういうことか団員の皆さんが体感し得たと同時に、送り出してくれる、助けてくれる人のありがたみに少しでも気づくことができたのなら幸いです。



長年、シュツットガルト市側で交流母体となっていたいただいているケーニギン・シャルロッテ・ギムナジウムのご理解に深く感謝いたします。本交流に関しては、同校のご理解ご協力なくしては成り立ちません。今回の訪問でも、ベンジャミン・ケーラー校長先生にご面会の機会をいただき同校をご案内いただいたほか、最終日のお別れ会にはケーラー校長先生のほか教頭先生をはじめとする諸先生方のご参加もいただく

など、本交流へのご配慮にたいし改めてお礼申し上げます。

そして、私たち派遣団の受入にあたり、校務等のかたわら実務面で文字通り奔走いただいた同校日本語教師の井上百子先生には、衷心よりお礼申し上げます。急ぎの対応が必要となった際には、関係者等との連絡・アレンジメントを迅速に進めてくださり、あらためてそのご尽力に感謝申し上げます。また今回、ホストファミリーを引き受けてくださったご家庭の皆さまと、学校を休んでプログラムに随行してくれた団員のホストフレンドの皆さんにもお礼を申し上げたいと思います。

シュツットガルト市の都市の規模としてはドイツ第6位を誇ります。メルセデスベンツやポルシェ、ボッシュ等ドイツを代表する世界的企業の本社を擁する産業を基軸とした都市ですが、中心部には新旧の宮殿や教会、美術館・歌劇場が隣接するほか、行政・学校関係の建物も建ち並び、伝統的景観との融合が図られた美しい街です。人口の45%が移民で180か国、70か国語が話されている多文化共生都市でもあり、近年は教育施策の充実に力が注がれていると聞きます。



各団員たちが、本研修を通して多様なドイツ文化・社会に触れ、感じたことや考えたことが本報告書につづられていますので、ご一読いただけると幸いです。日本とは異なる生活様式や言葉に悪戦苦闘した経験が今後の人生の糧となることを願ってやみません。

# 現地プログラムの振り返り

## 【執筆者】

9月19日（木）～9月21日（土）：加納あかり

9月22日（日） ホームステイプログラム

9月23日（月）：伊藤加純、松岡昊、安田百花、遠藤賢志郎

9月24日（火）：伊藤慧、青木彩華

9月25日（水）：吉田杏、三輪有希、樋口恵濃



## 大垣市から世界都市ミュンヘンへ

大垣市立星和中学校 2年 加納 あかり

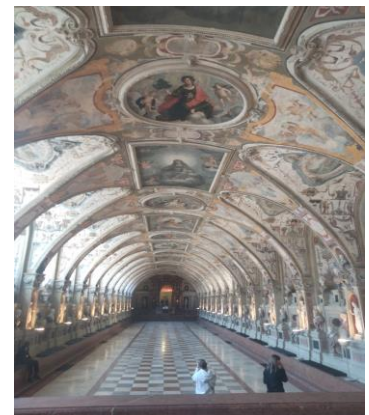
9月19日(木曜日)、研修1日目は新幹線などを乗り継いで羽田空港まで移動しました。その日は、羽田空港のそばのホテルで宿泊し、夜は窓の外から飛行機や街の明かりが見えて、これから始まるドイツへの旅の期待感をさらに高めてくれました。

2日目の朝、ミュンヘンに向けて羽田空港を出発しました。飛行機に乗るのは人生で初めてで、飛び立つ瞬間は、いよいよ日本を離れるんだと少し不安になりましたが、たまたま窓側の席で、息の詰まる思いで外を見ると、一気に高度が上がっていき、上空からの壮大な景色を眺めることができ気持ちが晴れました。途中、明るい時間帯におそらく北極海上空を通過しました。晴れていて、北極海が氷で覆われている様子をこの目で見る事ができ、本当に眼下一面が真っ白な雪と氷に埋め尽くされていて、その景色の雄大なことと言ったら言葉にしようもないほどでした。旅の初めに、地球の果てにある素晴らしい景色を観られることは幸運だと感じました。

いよいよドイツのミュンヘン空港に到着しました。ここからはドイツ時間へ切り変わるため、飛行機には14時間程乗っていたにもかかわらず、まだ同じ日の午後5時ということになります。入国審査と荷物を引き取って、すぐにバスでホテルに向かいました。バスの運転手にダンケシェンとお礼いったら、微笑んでもらえ、言葉が通じたことにうれしくなりました。一番初めにドイツの方とのコミュニケーションがうまくいったので、少し安心出来ました。

翌日、ミュンヘン市内のレジデンツ博物館に行きました。たくさんの絵画や像、大きなシャンデリアなどの装飾品が飾られていて圧巻でした。元は王様の宮殿だったこともあり、繊細だけど豪華な内装、装飾品で埋め尽くされていて美術館の様でした。特に天井がアーチ状になっている広間では、壁には像がずらっと並んでいて、天井には大きな絵画が広間の端から端まで描かれていて、とても美しかったです。

これだけのものを作るのにいったいどれだけの人が働きお金が使われたのかと考えたら、きっと大変な権力と富のあった王国だったのだろうと感じられました。写真で見たベルサイユ宮殿やルーブル美術館にも似た雰囲気を感じました。



そのあとはマリエン広場に移動しました。とても大きな広場で、周りにはカッコいい立派な建物に囲まれていました。建物のつくりや装飾は日本では見られないようなものばかりで、繊細に作られていて、地震が起きたら崩れないか心配になりました。特にひと際立派な新市庁舎は、ディズニーランドのホテルのようで、ファンタジーの世界が現実にあるような感覚で、とても感激しました。

広場の中央には塔があり、上に金のマリア像がありました。とても素晴らしい像でしたが、私はどうしてもJR岐阜駅の金の信長像が頭をよぎってしまいました。そのあと昼食をいただきました。昼食はソーセージの盛り合わせと巨大なプレッツェルがメインで、グラスにサクランボジュースが注がれ、想像していたドイツの食事そのものでした。想像上の食事を実際に楽しむことが出来たので大変満足できました。食事だけで、日本とこんなにちがうところがあるんだと、とてもおどろきました。

## ケーニギン・シャルロッテ高校

大垣市立南中学校 1年 伊藤 加純

9月23日（月曜日）の午前中は、学校見学としてホストフレンドの通っているケーニギン・シャルロッテ高校に行きました。



この学校は、高校の他に、日本でいう小学5年生から中学3年生も通っているのので、規模が大きく生徒がたくさんいました。

まずは校庭から紹介していきます。

外には広場、バスケットコート、サッカーグラウンドがあります。写真では人は写っていませんが、休み時にはたくさんの人が遊んだり、話をしたりしていました。中には、広場のベンチでランチを食べている人もいました。



周りを見渡してみると、エントランス、音楽室、食堂（写真左）、そして壁画（写真右）がありました。壁画は100周年記念のものだそうです。食堂は、あとで分かったことですが、この建物でお別れ会が行われました。まだ新しい建物でした。エントランスは屋根付きで、雨が降っても大勢の人がいることが出来るような空間になっています。



次は校舎の中です。右の写真は、廊下を教室のように使っています。廊下の活用方法が意外で面白かったです。

ロッカーは鍵がついていて、自分でパスワードを入力して解錠します。廊下には大きなポスターが張ってありました。

この日は、1時間目に数学、2時間目に英語、3時間目に化学の授業を受けました。数学と化学の授業はドイツ語での授業だったのでわからなかったのですが、英語の

授業は英語で授業をしていたのでなんとなくわかりました。ノートやタブレットにメモを取っていた人がいました。各教室にホワイトボードがありましたが、受けた授業の中では使っている先生はおらず、先生が一度も板書をしていないことに驚きました。授業ごと8人程度だったり、20人程度だった時もあったりして人数が違ったことや、週初めだったからかもしれないけれど、宿題の振り返りのようなことをして授業が終わったことがとても印象に残りました。教室の学生たちが積極的に挙手をしていて、自分の意見を時間をかけて発表している場面もありました。

ホストフレンドは登下校を電車でしたいましたが、自転車で通っている人もいます。かばんは大体の人はランドセルよりも小さいものを背負っていました。

## 高校見学の思い出～日本とは違う学校生活

大垣市立江並中学校2年 松岡 昊

私たちは研修5日目(9月23日)に各ホストフレンドの通う高校を訪問させていただきました。私は、ホストシスターのマレーネの通うヘルダーリン高校、そしてフリードリッヒ・オイゲン高校を訪問しました。そこには日本で言う小学5年生から高校3年生までの生徒が通っています。この高校見学では学ぶことがたくさんありました。はじめにヘルダーリン高校を訪れました。まず驚いたのは生徒が私服だったことです。ドイツでは日本とは違い制服というものが無いので生徒は私服で登校します。



この高校では社会の授業を見学させていただきました。

「この写真のどこからこの家族が貧しい事がわかるか」という先生のドイツ語での問いかけから授業が始まりました。すると一斉に生徒の手が挙がります。私はこの積極的な姿に感心しました。大垣市の生徒はタブレットでの学習を行っていますが、ドイツの生徒も同じようにタブレット学習を行っていました。タブレットに自分の考えを書き、先生に提出するなど、大垣の学校と同じような光景も多く見られました。授業が終わるとマレーネの友達がたくさん話しかけてくれました。言語の壁がありながらも、ジェスチャーで必死に伝えようとしてくれたり、笑顔で話を聞いてくれたり、フレンドリーな学生が多くとても嬉しかったです。

おしゃべりが終わるとマレーネがフリードリッヒ・オイゲン高校まで歩いて案内してくれました。この高校では学校長への挨拶、学校見学をさせていただきました。学校の敷地はとても広く、外には遊具、広場、テーブルとベンチなどがありました。また駐輪場がなく、生徒は徒歩かバスで登校するそうです。外のベンチでマレーネとお菓子を食べていると、音楽室から美しい歌声が聞こえてきました。日本でも聞いたことがあるヨーロッパで有名な曲が何曲も聞こえてきて素晴らしかったです。

続いて校舎の中に案内してもらいました。生徒は校舎内をスリッパに履き替えず下靴で生活していました。生徒は教室や廊下で遊んだり、静かに本を読んでいたたりする人もいました。はじめに美術室に案内してもらいました。そこにはたくさんの生徒の作品が展示されており、どれも素晴らしかったです。中でも一番印象に残っているのは、粘土で作った自画像の作品です。目のシワや唇の形など、本物そっくりでとても感心しました。



続いて校長室に案内していただき校長先生とたくさんお話をしました。校長先生に大垣のパンフレットを渡すと大垣市の事を知ってくれていたみたいで、うれしそうに「ダンケ!」と仰ってくださいました。パンフレットに載っていた桜がとても綺麗だと感動されていました。校長先生からは高校の行事が載っているととても分厚い冊子をいただきました。スペイン派遣などたくさんの面白そうな行事でいっぱいでした。

私は高校見学から文化や習慣の違いをしっかりと学ぶことができました。この貴重な経験を必ず将来につなげていきます。

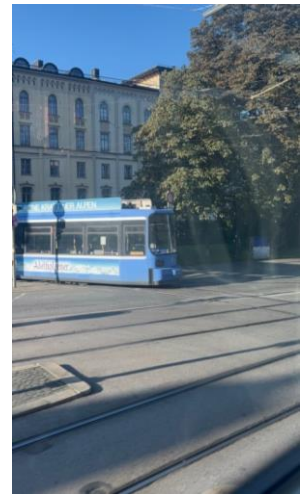
## 高校見学の思い出

大垣市立東中学校3年 安田 百花

私はホストフレンドのエスケが通う、セント・アグネス・ギムナジウム・シュツットガルト（通称：セント）というシュツットガルト最大規模かつ唯一の女子校へ行きました。主に大学進学を希望する生徒が通うそうです。

朝、家を出た時、てっきり自転車で学校までいくのだと思っていたら、路面電車を使って行くのだそうです。確かに街中に路面電車のラインがたくさんあったので、交通の便は良さそうです。雨や雪の時には路面電車の通学なら暖かくて良さそうだなと思いました。

この学校について、もともとインターネットでチェックはしていたものの、実際の学校はとても大きく、広い中庭があり、画面越しでは分からないような歴史の重みを感じる造りでした。なお、全てのドイツの街並に共通して感じたのですが、左右対称で直線的なデザインが多く、色使いが日本とは全く違いました。校舎の中はたくさん教室があり、生徒もたくさんいました（10歳～18歳にあたる学生が通っているそうです。エスケの学年は100人いるそうなので、900人ほどいるのかも！）。そして当然のことながら全員女子！私はずっと共学で過ごしてきたので、まずそこに圧倒されました。



この日エスケは自分の授業ではなく、特別に私と一緒に美術の授業を受けてくれることになりました。授業の内容はドイツ語なので理解できませんでしたが、昔のデザインの美しさを学ぶといった内容だったのではないかと思います。

先生が来ると全員立ち上がり、少しお祈りをしてから授業が始まりました。先生も生徒もタブレットを使用して、プレゼンを聞いたあと意見交流をするというものでした。ハンドサインは人差し指を使っていたので、日本だと「質問があります」のときに使うため、とても印象に残りました。

私が一番注目していたのは、生徒の雰囲気です。

日本の中高生は必ず制服を着用、髪染め禁止等の規則があると思いますが、訪問先の生徒は皆それぞれ好きな服を着て、ピアスを付け、ネイルを塗って、髪型も様々でした。個々のおしゃれを楽しんでいる・自由に自分を表現できていて素敵だなと思いました。でも、授業は真剣に受けていて、そのギャップがかっこよかったです。

それに、同世代の女子だというのに、みんな背が高くてうらやましかったです！SNSで見るとような、アジア人が憧れるまさに「海外ガール」といった雰囲気の子もいて、私にとって、とても刺激的な高校見学になりました。



## ルートヴィヒスブルク城

大垣市立北中学校 3年 遠藤 賢志郎

研修5日目（9月23日）の午後にシュツットガルト郊外にあるルートヴィヒスブルク城を見学しました。その日の午前中は、ホストフレンドの通う高等学校を見学しました。物理と体育の授業を見学しました。次の授業のために廊下で待っている生徒がくつろいでいる姿が日本と違い印象に残りました。その後、他の団員達と駅に集合しました。駅から城までは歩いて20分ほどかかりましたが、ホストフレンドやメンバーと道中の風景の感想を話し合ったり、自分の趣味、得意なこと、学校のこと、将来なりたいことなどを話していたらあっという間でした。

ルートヴィヒスブルク城は当時の姿で現存する欧州最大級のバロック建築です。1704年からおよそ30年の年月をかけて、ドナート・ジュゼッペ・フリゾーニによって建てられ1733年に完成しました。この城はバロック、ロココ、新古典主義という3つの異なる時代とそれぞれの建築様式が融合された城です。広さでいうと18の建築群と450室を超える部屋からできているため非常に横に広いという印象でした。中に入るとそれはもう圧巻、早く説明を聞きたいと思っていた矢先、日本語翻訳の説明がない！自分にドイツ語が理解できたらと思っていた時にドイツ側の先生が私の元へ来て細部まで翻訳をしてくれました。おかげで知りたい内容がよく理解できました。先生には感謝してもし切れません。

さて、内装の話に戻りますとヨーロッパ風の美しく豪華な調度品で装飾された数々の部屋には感動すら覚えました。特に鮮明に覚えているのは合わせ鏡です。合わせ鏡を部屋に置くことで小さな部屋でも大きく感じさせる仕組みになっていました。こんなに広いお城なのに部屋の中をもっと広く見せる仕掛けがあることが自分にとってとても面白く感じたところです。またこの城にはそのままの舞台仕掛けが残るヨーロッパ最古の城内劇場もありました。これほど大きなお城だと劇場まであるのには驚きました。ほとんどの部分は一度補修工事がされたそうですが、一部の柱はそのままの形で残されているそうです。ほとんどの内装は写真撮影ができませんでしたが、逆に自分の目でより深く観察したおかげで、鮮明に記憶することができました。

ドイツに限らずヨーロッパの建築は宗教や複雑な歴史背景と密接に関係していることを知ることができたのは、今回の研修で現地に行って実際の建物を見学できたからだと思います。将来建築に関わる仕事に就きたいと思っている私にとってはまさに夢のような空間でした。自分の将来の夢のために建築をより深く知ること、学校での勉強も頑張りたいと思える良い機会になりました。



## カラフルな明るい街

大垣市立南中学校2年 伊藤 慧



9月24日（火曜日）、この日、私たちはチュービンゲン市に行き、街の見学をしました。

チュービンゲン市の街並みは、とてもヨーロッパという感じがしていて、おしゃれでお城のようなカラフルな家が建ち並んでいて明るい雰囲気がありました。私たちはその街のドイツ人ガイドさんといっしょに山（もしくは丘）の上のほうまで歩いて見学しました。チュービンゲンは1477年創立のチュービンゲン大学で有名な街としても知られていて、いろいろなところに大学関連の建物が建てられていました。法学、哲学、医学、神学を中心に発展した大学ということで、大きな修道院も道の途中にありました。その修道院はだいぶ昔に建てられた建物だけど、いまだに通っている学生さんたちもいて、そのきれいな建物を

私たちは静かに見学しました。

チュービンゲンの大学が与える影響はとても広く大きいもので、チュービンゲンの街自体がほとんどどれも大学に関わるような施設や、大学にいわれのある樹木、アートなどばかりでした。私たちが城郭のような建物のある丘の上まで登るのに歩いた道路は、約16世紀のとても古い家が多く建ち並ぶ石畳の道で、この地域は特にドイツの中でも方言が強い地域だそうです。また、建物にもチュービンゲンならではの特徴が様々みられます。



その後、私たちは旧市街の中心地を訪れました。噴水のあるマルクト広場は、市庁舎や商店、カフェなどが取り囲むにぎやかな場所でした。その広場の周りを取り囲む建物も特徴があり、建物の所有権にまつわる過去の出来事から、家の内部のつくりも変わっているようで、いろいろな中世からの文化が今も楽しめる場所でした。ワインの生産が盛んで、ワインの神様が家の外側の角側の壁に掛けられている家もありました（写真右）。



チュービンゲン市庁舎は（写真左）とてもお洒落でこの街の歴史が市庁舎の壁に大きく描かれていて、そこに刻まれている絵なども素敵でした。この市庁舎は1435年に建てられ、上部の天文時計は1511年に取り付けられました。このマルクト広場では、たびたびいろいろな店が広場に並ぶマーケットが開かれ、人々はそこで買い物をしたりします。私は、この街は住んでいる人も生き生きと楽しそうに生活していると感じたし、活気がある場所だったので素敵だと思いました。また、この街にとっても興味を持ったので、もっと調べてみたりして知りたいと思いました。

## ネッカー川の川下り

大垣市安八郡安八町組合立東安中学校 2年 青木 彩華

研修の6日目のことです。今日は朝からハプニングの連続でした。ホストファミリーが持っていた予定表の集合時刻が間違っていて、しかもホストフレンドのリナが、乗る電車を間違えてしまったからです。私のもらった予定表とは時刻が違っていたので疑問に思っていたのですが、私がリナに話しをしなかったのが、ちゃんと言っておけばよかったなと後悔しました。言葉で伝えることはとても大切だということをこの経験から学びました。リナは焦っていて落ち込んでいたけど、私にとっては、思いがけない出来事が逆に面白くて心に残る日になりました。

私が乗った電車は20分の遅れがでていました。日本の電車はあまり遅れがでないので、本当にすごいと感じました。10時過ぎぐらいに何とか到着はできたのでホッとしました。

昼食は大学の学食を食べました。私は、パスタとチキン、ドレッシングのかかった野菜を注文しました。学食は、自分でおぼんを持って食べたいものを注文してその場で盛りつけてもらって会計をします。ドイツの大学の学食なんて初めてのことで、やり方が分からなくて不安でしたが、ちゃんと注文ができてよかったです。ドイツの大学の学食と日本の中学校の給食は全然違っていました。食べていると周りの学生さん達も昼食をとっていました。パスタの麺が日本よりとても短くて、味も日本と少し違っていました。美味しかったです。



午後からはいよいよネッカー川の川下りでした。シュトゥハーカーンというゴンドラのような船で下ります。側面に板がついていて横向きに向き合って座るというとても面白い形です。エンジンはなく、日本でいう船頭さんのような人が長い棒で勢いよく川の水を漕いでいました。漕いでくれた人は明るくて面白い人でした。彼は、街の説明をしてくれましたが、ドイツ語で話していたのであんまりよく分からなかったです。残念でした。船は川の流れて進んでいきます。川もなだらかで風が心地よく、いろんな模様のカモも泳いでいます。また川から見る街並みは地上から見るのとは異なり最高でした。しかし一つだけ驚いたことがありました。それは、船の底に少し穴が開いていたことです。穴から水が入ってきて私の靴は濡れてしまいました。船が沈まないかと少し心配しましたが、そんなことはなく無事に戻れました。なぜ、穴が開いているのか？は今でも疑問です。

地上から見る景色と、ゆっくりとのんびりと水上から見る景色は、同じものを見ても違って見えることを学んだ貴重な体験となりました。

解散した後は、リナと一緒に宮殿の近くでラズベリーのシナモンロールを食べたり、レゴでオリジナルの人物を作ったりと最後まで楽しみました。



## 市庁舎訪問

大垣市立南中学校 3年 吉田 杏

9月25日(水曜日)、ホストマザーのアルランさんと、電車と徒歩で約1時間で大きな広場に着きました。そこには、威厳のある建物が待ち構えていました。シュツットガルト市の市庁舎です。大垣の市役所とは違い、石で建てられていました。

市庁舎のロビーでは、シュツットガルト市記録課という部署のローラさんが私たちを出迎えてくれました。そしてローラさんの説明とともに、市庁舎内を案内していただきました。ちなみにドイツの建物で1階というと、日本でいう2階にあたります。(以下、ドイツ式で階数を記します。)

ローラさんにお会いしてから私たちは1階に移動しました。1階には、市庁舎の中で最も重要な市長室があります。すると突然、同行していた何人かのホストファミリーの人達が何かを見て歓声を上げました。視線の先にいた男性は、シュツットガルトのサッカーチームの有名な選手だそうで、市長室へ入って行きました。そんな有名人も行き来するほど大事な場所なのだなと分かりました。



2階に上がり、一番に目についたのは大きな馬の像。この馬の像はシュツットガルト市の紋章に描かれています。ガイドさんによると、それにはシュツットガルトの歴史が関係しているそうです。シュツットガルトができたのは、公式では13世紀だとされていますが、実はそれよりも前から人が住んでいたそうです。その人々は雌馬を育てたので、馬の飼育場という意味のドイツ語から、この町の名前がシュツットガルトになっていったそうです。私の印象では、とても栄えていて近代的な印象の方が強かったので、馬の庭というのを聞いて少し不思議な感じがしました。

シュツットガルト市の市庁舎には、「パーテルノステル」という珍しいエレベーターがありました。海外の映画で見たことがある人もいられるかもしれません。このエレベーターは19世紀にイギリスで作られました。このエレベーターはずっと動き続けます。しかも、このエレベーターにはドアがありません。日本では考えられないことです。危険なエレベーターなので、乗り降りのタイミングが難しく、少し勇気が必要です。少し怖くて、ドキドキしました。エレベーターに乗ることにこんなに集中したのは初めてでした。降りたときには謎の達成感がありました。またシュツットガルトに行ったら乗りたいです。



最後にシュツットガルト市の市庁舎の中で一番大きい会議室に行きました。市の議員さんたちが普段重要な物事を決めている部屋だと思うと少し緊張しました。その会議室のモニターで、シュツットガルトの紹介映像を見ました。ホストファミリーと行ったTVタワーや図書館などの場所が写ると、アルランさんと楽しかったこと、嬉しかったことを思い出し、感極まりました。シュツットガルトの魅力をもとめた写真集もいただき、興味深い話も聞けて、とても充実した訪問になりました。これからもシュツットガルト市と大垣市の友好関係が続くことを願います。

## シュツットガルト市街見学

大垣市立西中学校2年 三輪 有希

9月25日(水曜日)、私たちはシュツットガルト市の市庁舎を出た後、シュツットガルト市を見学しました。見渡す限り教会やお城などの歴史ある建物が広がっていて、最終日でしたが改めてシュツットガルトの美しさを実感しました。

市庁舎を出た後、最初にマルクトハレという市場に行きました。最初建物を見たときは市場だとは思わず、中の想像が付きませんでした。入ってみると日本の市場とは雰囲気が全く異なる広々とした雰囲気で、売っているものは国際色豊かで、ワインやチーズ、果物、肉など数えきれないほどの食べ物がそろっていました。ここはシュツットガルトで一番古い線路があったり、第二次世界大戦の影響も受けていたりするなど、当時のいろんな知恵や歴史が詰まっている市場でした。見慣れない光景にすごく驚きましたが、たくさんの人が通うこの市場の明るい雰囲気がとても印象的でした。



市場を出た後はシラー広場を訪れました。広場の中央には市の合唱団によってたてられた大きなシラーの像がありました。この像は、シラーが悲しそうにうつむいているように見えたが、実際には合唱団は嬉しそうな表情の像を立てる予定だったそうです。しかし、完成した像のシラーは悲しそうな表情をしており、これを目の当たりにした合唱団の人たちはその結果に悲しんだというおもしろい歴史があります。このような背景を知った上でシラーの像をみると、その印象も大きく変わりました。



シラー広場の近くには古いお城があり、ほとんどの建物が第二次世界大戦で破壊された中で生き残ったお城だと聞きました。このお城は今もなお当時の雰囲気を伝えている建物であり、ほかの建物とは異なる、引き込まれるような魅力がありました。また、戦争で苦しんだ人々の想いが形として今もなお受け継がれていること、そしてそれを守り続けている人々の努力にも感動しました。

そのあとは宮殿広場を訪れました。宮殿広場前の道路は歩行者天国となっており、地元の人から観光客までいろんな人が行き交い、にぎわっていました。宮殿広場内には芝生が広がり、ベンチに座って話している人や散歩をしている人がいたり、鳥が列を作って歩いていたりとどかな風景が広がっており、この広場だけ時間がゆっくりと流れているようでした。



このシュツットガルト市街の見学を通し、日本とドイツの文化や街並みは大きく異なるけれど、文化や自然を大切にしているところは、大垣と似ているように感じました。そして、自分の街の文化や自然を大切にしていきたいと思いました。この研修を通して感じたドイツの魅力、そして大垣の魅力をもっと多くの人に伝えていきたいです。

## Abschiedsparty —お別れ会—

大垣市立東中学校3年 樋口 惠濃

9月25日（水曜日）の午後6時から、ケーニギン・シャルロッテ高校にてお別れ会が行われ、13名の派遣団員とホストファミリーの皆さんが集まりました。5日間お世話になった現地の家族や訪問先の学校の先生方へ感謝を伝える会です。研修最終日、この一週間はとても早く感じました。

事前研修では2グループに分かれて、カルタ&福笑い組とソーラン節組で練習をしてきました。小学校で習ったこのソーラン節は、豊漁を願う漁師さんの作業歌で、網を引き揚げるときの音頭です。また「まっすぐ目指して進もう。嵐が来ても、神の御加護によって進んでいけますように」という意味も込められているそうです。



初めて団員と顔を合わせた時は、お互いに意見も言えなくて、呼吸もバラバラだったけれど、毎回練習を重ねていくうちに、互いにアドバイスをし合えるようになり、パフォーマンスも団結してきて、このお別れ会では練習の成果を発揮できました。活気のあるダンスを披露できて良かった思いました。ホストファミリーの皆さんが、ハイ！ハイ！ソーラン！ソーラン！と掛け声と手拍子をしながら、とても楽しそうに鑑賞してくださり嬉しかったです。一緒に踊りましょう！ドイツ語で「イエット ヲルデン ヴィア アウッフ タンツウン」とホストシスターに教えてもらいました。



一方、カルタ&福笑い組の団員は、日本の伝統的な遊びを紹介して、ドイツの方々実際に体験してもらいました。ホストファミリーの方に聞いてみたところ、「日本の伝統文化はとても面白く、興味深いです。」と語ってくれました。

福笑いの顔やカルタの絵やお題は、手書きのかついで、すべて自分たちで用意したオリジナルです。大成功を収めることができ本当に良かったと思います。

その後は、みんなでテーブルを囲んで夕食をいただきました。学校側のシェフの方たちが作ってくださったメニューと各家庭から持ち寄ってくださったデザートなどがありました。なかには、ドイツ版の餃子のようなメニューがありました。英語ではダンプリングといますが、ドイツ語ではMaultasche（マウルタッシュェ）といいます。これにオニオンソースをかけると最高にイケました。私自身タマネギは苦手でしたが、これはとても美味しくいただきました。ほかにもポテトやサラダ、デザートのケーキやマフィン、チョコパイなど豪華な食事が並べられていました。好き嫌いの激しい私でしたが、ドイツの食事はどれもとても美味しかったです。

また一人ずつ短いスピーチをしながら大垣に関するクイズを出しました。多くの方がクイズに参加してくれたり、おもしろい回答を考えてくださったりして本当に楽しかったです。あつという間のお別れ会でしたが、団員とホストファミリーの絆を深められる、とてもいい機会になりました。

ドイツ側の校長先生、教頭先生、授業でお世話になった先生方、井上先生、そしてホストファミリーの方々、この5日間たいへんお世話になりました。ありがとうございました。引率して下さった団長の富田先生、通訳引率の鈴木先生ほか、団員仲間みなさん、最高の経験と学びをありがとうございました。

# ホームステイプログラムの 振り返り

学年別五十音順



## 言語の壁を越えて

大垣市立南中学校1年 伊藤 加純

僕がホームステイした家族はマルクス（父）、ユスティナ（母）、ガビ（姉）、アントニア（妹）、ダニエル（兄）、そしてトフィー（ハムスター）の5人1匹のビサンツ家の家族でした。ガビはもう結婚していて普段は家にいないそうですが、たまたま帰ってきていたそうです。僕は、シュツットガルトで家族に会う前に、既にメールで遣り取りはできていたのですが、相手の顔が分からなかったのも、どんな人だろうとわくわくしていました。そしてシュツットガルトに到着し実際に会ってみると、家族みんなが優しく接してくれて安心できました。僕はあまり英語が得意ではないのですが、優しく接してくれたホストファミリーのおかげでたくさん話をする事が出来ました。そしてホストファミリーとの生活が始まりました。

ホームステイ初日の土曜日に家の紹介をしてもらいました。バルコニーもあって1フロアなのにとっても広かったです。夕飯は、たくさんの料理を出してもらいました。ご飯の時には「いただきます」のような挨拶もありました。次の日は、ホストファミリーと過ごす日だったので、どこに行くか一緒にプランを考えました。そして行くことになったところはホーエンツォレルン城というお城と、シュツットガルトのテレビ塔です。ホーエンツォレルン城は高い山の頂上にあり、景色がきれいでした。城の周りには木がたくさん生えていました。午後2時頃まではホーエンツォレルン城を満喫しました。次にテレビ塔に行きました。シュツットガルトのテレビ塔は世界で初めて建てられたそうです。高さは217mで、あたりを見渡すと夕方でしたがラジオタワーが見えました。そして家に帰って夕食を食べました。

そして週が明けた月曜日は、学校見学があったので3時間目まで受けました。その日は数学、英語、化学の授業でした。英語の授業は分かる部分もありましたが、ドイツ語で授業が進められることもあり難しかったです。ただ、生徒の服装や授業態度などドイツの学校生活を見学することができたのは良かったです。

ドイツから帰国する前日の段階で、お土産をほぼ何も買ってなくて何を買おうか焦っていました。そのため僕は、自分の英語が通用するかどうか最初はわからなかったけれど、勇気を出して英語でダニエルやお母さんにいいお土産を買えるところを聞いてみました。そうすると自分の言いたいことが伝わったようで、自分の英語が通じてほっとしました。その甲斐あって、無事良いお土産を買うことが出来ました。

いよいよシュツットガルトを去る日、正直に言うと、ホストファミリーと別れる時は大垣を出発した時に両親と別れた時よりもちょっとだけ悲しかったです。それぐらい僕にとってビサンツ家は今一つ一緒にいたいと思える存在でした。僕はこのホームステイの期間で新しい家族と出会い、一緒に過ごしていく中で、とても仲良くなる事が出来ました。僕はまたドイツに行ってビサンツ家に会いたいと思いました。今度はドイツ語で話せるようになりたいと思います。この研修は僕の考えや性格を変えるような大切な研修でした。僕はこの家族に出会えてとても良かったです。



## ホストファミリーとの思い出

大垣市安八郡安八町組合立東安中学校 2年 青木 彩華

私のホストファミリーはフィードラーさんという4人家族でした。

お父さんはリュディガー、お母さんはヴェレナ、弟はゲオルグという名前でホストフレンドはリナと言います。ホストファミリーと対面する高校に着いた時、楽しみでもありましたが、ホストファミリーとうまくやっていけるかすごく心配で不安でしたが、リナが迎えに来て「こんにちは」と挨拶をしてくれホッとしました。彼女は英語やドイツ語があまり話せない私に翻訳機や日本語、ジェスチャーを使って話しかけてくれ、すごく助けられました。



家に着いた時、リナのお母さんのヴェレナが私を明るく出迎えてくれました。そして、部屋や家の案内をしてくれました。家は3階建てでトイレが3つもあってすごく驚きました。夕食は鶏とキノコのカレーのような料理とチョコレートケーキでした。日本では食べたことのない料理でしたが、すごく美味しかったです。1日目は緊張していてあまり話すことが出来ず、また帰宅が遅かった弟さんと会うことができなかったのが残念でした。

次の日には、お土産を渡しました。一人一人にあげたお土産をすごく気に入ってくれました。持ってきてよかったです。午後からはお母さんとリナでハイデルベルクというシュツットガルトの近



くにある歴史的な都市に行きました。ネッカー川に大きな橋が架かっています。お昼にはマルクト広場のカフェでアボカドソースのかかったハンバーガーとアイスティーを食べました。その後には聖霊教会に行きました。神秘的な空間で美しく、キリスト教信者がお祈りをしていました。そこで私はろうそくに火を灯すというキリスト教の伝統や肌が露出していると教会には入れないということを学びました。最後は、ハイデルベルク城に行きました。電車が混ん

でいたため急な坂道を徒歩で上りました。このお城は戦争で何度も攻撃を受け自然災害に2度もありましたが、建物は残っており、ルネサンス式のハイデルベルクの代表的な立派なお城でした。

その後にはドイツのアイスクリームを食べました。冷たくて美味しかったです。帰宅後、リナと一緒に日本のアニメを見ました。日本語での放映で、字幕は英語です。

どんどん日が過ぎていくうちに、まだ日本に帰りたくないという気持ちになってきました。ホストファミリーは私にすごく優しくしてくださり、楽しませようとしてくれました。本当に感謝しかありません。最後は私に沢山のお土産を持たせてくれました。すごくうれしかったです。空港についてリナとお父さんと別れる時には思わず泣いてしまいました。

この経験は私にとってかけがえのない大切な思い出になりました。最初は不安で大丈夫か心配だったけれど、ホストファミリーとドイツの日常生活を体感できて楽しかったです。帰国後もリナとメールでやり取りをして交流は続いており、新しい発見の連続です。研修で学んだことを大切にしていって、今後の学校生活や自分の将来にも活かしていけるようにしたいです。

## 絆が増えた旅

大垣市立南中学校2年 伊藤 慧

私は、ホストファミリーと対面する前は正直自分の英語や語彙力などの言語の壁の心配があり、コミュニケーションがとれるかなという不安もありました。そのため、ホストファミリーと顔を合わせる日まではとても緊張していました。ですが、思ったより自分の英語がうまく伝わり、コミュニケーションが取れたことにより、ホストファミリーと過ごした時間はどれも楽しくて、新しい発見もたくさん経験することができました。

私はホストファミリーと生活しているときが一番ドイツの文化に触れることができたと思います。食文化や日々の生活、ルーティン、学校生活など、日本とはやっぱり少し違っていたので違和感を覚えたけれ



ど、そのことが私にとって今回の良い学びになったと思っています。

例えば、これは私のホストファミリーだけだったのかもしれませんが、朝ごはんというものはあまりなくて、朝はベリーティーとか温かいお茶を一杯飲むだけのことが多くてびっくりしました。またお弁当も丁寧に作るというよりかは、ブルーベリーやリンゴなどのフルーツや、ドイツらしい感じの固いパンを持っていくというシンプルな形が多かったです。そうしたことは、どれも新鮮で興味深かったです。



シュツットガルトを去る前日、つまりケーニギン・シャルロッテ高校でお別れ会を行っていただいた日の午後の自由時間に、私はホストフレンド達と駅の近くのショッピング街を歩きました。お店の一つのレゴシ

ョップに入り、オリジナルのレゴキャラクターが作れるコーナーで組合せて遊んでいました。その時に作って完成したのが右の写真のレゴです。私のホストフレンドはこれを私にプレゼントとしてくれました。また、その夜にはホストファミリーがサプライズでアルバムを私にプレゼントしてくれました。本当に想像してなかったし驚いたけれど、とっても嬉しかったです。一緒にペンなどで仕上げのデコレーションをして、最後の夜を過ごしました。



本当に1週間素敵な思い出ばかりで、まだ帰りたくないという気持ちでいっぱいでした。ですが、帰りの飛行機では父や母に思い出話をたくさんしたい気持ちに変わり、帰国したその日は一日かけて語りつくしました。

また最後に、この研修に関わっていただいた、団長の富田先生はじめ引率者の皆さん、一緒に行った9人の仲間にはとても感謝しています。今回、私が安全に素晴らしい研修をできたのも、皆さんのおかげだと改めて感じました。



## 本当の家族みたいに仲良くなれた

大垣市立星和中学校 2年 加納 あかり

私はホストファミリーと5日間過ごし、本当の家族のように仲良くなれました。特にアンジェリーナはお姉さんのような存在で、私に色々なことを教えてくれて多くのことを一緒に体験しました。



私は、外国の知らない家族の中にひとりで行くホームステイというものがとても不安でした。しかし、ドイツに行く前にアンジェリーナとメールでやり取りをして、アニメや漫画が好きなことなど多くの共通点があることがわかりました。また、彼女は優しい言葉を送ってくれてとても歓迎してくれていることが伝わり、会うのが楽しみになりました。そして、シュツットガルトで実際に会ったら、本当にとっても歓迎してくれて、すぐに仲良くなりました。

ホームステイ先のハイムシュー家は4人家族で、お父さんのフィリップ、お母さんのコニー、お兄さんのアントニオ、そしてアンジェリーナという構成です。家族はみんな優しく親切で、私にわかりやすいように簡単な英語でゆっくり話しをしてくれるので、何をするにも本当に楽しかったです。

私が一番楽しみにしていたのは、ホームステイ先で食べる家庭料理です。中でも一番印象に残っているのは朝食で、パンとパプリカの入ったサラダとリンゴでした。メニューとしては普通に感じるかもしれませんが、パプリカサラダがドイツで食べたどのレストランのサラダよりおいしく、感激しました。そして一番気に入ったのがリンゴです。庭の奥に森があり、その木にリンゴの実がなっているのです。それをもいで、丸かじりしました。甘酸っぱくてさわやかな味と香りで、本当に素晴らしい朝食でした。

アンジェリーナとはいろいろなことをしました。家族の紹介をしたり、一緒にアニメを見ながら感想を言いあったり、絵を描いたりしました。アンジェリーナは絵が上手でした。アンジェリーナは、たまたま別の団員のホストフレンドと仲が良く、その団員と4人でゲームをしたり買い物に行ったりしました。



アンジェリーナとのコミュニケーションは、身振りでリアクションをしたり、簡単な英語で会話をしたりしました。単語だけでも手振りなどをつければ意外と通じました。コミュニケーションで大事なものは完璧な文じゃなくて、伝えようとする気持ちなんだと思いました。その上でより詳しい話をしたいときは翻訳アプリを使いました。翻訳アプリの助けによって思っていることをちゃんと伝えることができ、アンジェリーナの伝えたいこともわかったので、深く通じ合うことができたと思います。

私は外国の方と仲良くなることはとても困難なことだと思っていました。日本人同士でも仲良くなるのは大変なことなのに、言葉も文化も違う外国人と仲良くなることなんて想像もつかないことでした。しかし、仲良くなるのに必要なことは違いを埋めることではなくて、親切にし、受け入れるという心だということが体感できました。ホストファミリーがとても親切に私を受け入れてくれたことで、私は心を開くことができ、つたない言葉でも本当の家族みたいに仲良くなることができました。この研修で得た体験は私の心に残り続けるだろうと思います。

## ホストファミリーとの思い出

大垣市立江並中学校2年 松岡 昊

不安な気持ちが大きいまついにホストファミリーと対面の時間。楽しみという思いもありましたが、やはりしっかり話せるかなという不安が大きかったです。第一印象が大事ということ先生に教えてもらっていたので、絶対に笑顔で元気に話そうと決めていました。しかし、いざ対面すると頭が真っ白になり何を話せばいいのかわからなくなり、ずっと「Hello, Hello」と言い続けていました。するとホストシスターとホストマザーが大きな声で笑ってくれて一瞬で緊張が解れました。そこからは一生懸命ジェスチャーを使い、段々と思いを伝えられるようになっていきました。伝わった時は本当に嬉しかったです。その後、優しいホストシスターが私の大きなスーツケースを運んでくれて車でホストファミリーの家に到着しました。家ではホストファーザーとホストブラザーが元気な声で出迎えてくれました。ドイツでは家の中でも靴を履くと思っていたのですが、靴を脱いで生活すると聞いてとても驚きました。「何が食べたい？」と聞かれたので、「ピザ」と答えると「今からピザを作ろう」と言い準備してくれました。トマトソースの上にとっぷりのチーズを乗せ、とても美味しいピザができました。そのピザがドイツ食の中で一番美味しかったです。その後シャワールームに案内してもらったのですが、お湯の出し方が解からず蛇口と格闘しているとホストシスターが優しく教えてくれて思い出に残る体験でした。



翌日、チョコレート作りができる店に連れて行ってもらいました。高速道路を利用しましたがドイツの高速道路は速度無制限なので、ホストファーザーが170キロの速度で運転していました。今までに経験した事のないスピードで少し不安でしたが楽しかったです。帰りの車で作ったチョコをマレーネと食べましたが日本のチョコよりも甘くて美味しかったです。

次の日の午前にはマレーネが通う高校を見学させていただきました。日本と違う点がいくつもあっていい経験になりました。その日の午後には別のホストファミリーと合流しドイツで有名なDMという薬局に買い物に行きました。

DMには、お菓子、化粧品、子供服など何でもあったのでお土産を少し買いました。

また別の日にはホストファミリーに動物園に連れて行ってもらいました。日本の動物園ととても似ていました。ゴリラと一緒に写真を撮ってもらったり、とても楽しかったです。

こんなに充実した楽しいホームステイも一瞬で終わり、ついにお別れ会の日がやってきました。私たちは全力でソーラン節を踊ったり、大垣クイズを出したりして、日本や大垣の事を知ってもらうために頑張りました。そして次の日、空港まで送ってくれたホストファミリーとハグをして「またいつか会おう」と約束をしてお別れしました。とても寂しかったですがいつか会える日が来ることを楽しみにしたいと思います。

私はこのドイツ研修のおかげで成長することができたと思います。海外に行くことで日本とは異なる文化を学んで経験値が上がり、想像力が豊かになったと自分自身が成長したことを実感しています。この貴重な経験を忘れず、家族、先生、大垣市に感謝し、将来につなげていきます。

## かけがえのない5日間

大垣市立西中学校2年 三輪 有希

私がお世話になったホストファミリーは4人家族のフレックさん一家でした。お父さんがドイツ人、お母さんが日本人の家庭で、ホストフレンドで同い年のスマレ、その弟で11歳のカイトが出迎えてくれました。スマレとはドイツに行く前からメールでやり取りをしていましたが、初めて会ったときはお互いにシャイなところもあり、緊張してあまり喋れませんでした。

次の日はホストファミリーと過ごす日でした。午前中は家でアニメを見たり、ホストファミリーと話したりしました。アニメはドイツ語だったため何を言っているかは全然分かりませんでした。日本のアニメの「セーラムーン」がドイツで放送されていることにはとても驚きました。午後はシュツットガルトタワーへ連れてってもらいました。シュツットガルトタワーに向かっているとき、お母さんに「あまり高くないから期待しないほうがいいよ」と言われましたが、いざ登ってみるととても高く、シュツットガルトの街並みが一目で見渡せてとてもきれいでした。景色を眺めていると、お父さんが英語であそこはこういう場所だよ、という説明をしてくれたおかげで、シュツットガルトについてもたくさん知ることができました。下に降りた後はキッチンカーで買ったフライドポテトを食べ、Bluna Mixというコーラとファンタオレンジのミックスジュースのようなものを飲みました。フライドポテトは日本のものよりも美味しく感じたし、初めて飲んだBluna Mixもとてもおいしかったです。家に帰った後はBBQをしました。フレック家のBBQはお父さんが外で全部焼いてくれて、それを室内で食べました。どれもおいしかったけど、やはりソーセージは格別でした。



ホームステイ2日目からは他の団員とそのホストフレンドみんなでプログラムに沿って様々な場所を訪れました。最初の方は日本の団員と行動してしまうことが多かったですが、スマレとできるだけ一緒に行動したりたくさん会話を交わしたりして、スマレと過ごす貴重な時間が1秒でも長くなるよう心掛けました。家でもカイトとスマレとマリオカートをしたり、お父さんも交えてみんなでボードゲームをしたりして、コミュニケーションをとって

いくうちに、初めて会った時にあった私とスマレの距離感もいつの間にか埋められ、最後にはとても仲良くなれました。

また、このホームステイを通して得た学びもたくさんありました。例えば、日々の習慣や遊び、ごみの分別などです。特にごみの分別は日本よりも細かく、お菓子の袋でもプラスチックと紙で分けていることには驚きました。日々生活しているだけでもさまざまな日本との違いが見つかり、ホームステイならではの発見や驚きもいっぱいでした。

この研修を通し、日本とは異なる文化を様々な視点から学べたのはもちろん、海外を知ることや海外の人と交流することの大切さ、そして日本の良さをも実感させられました。スマレとは日本に帰ってきた今も連絡を取り合っています。この奇跡のような出会いを大切に、今後もずっと交流を続けていきたいです。この経験は私の一生の財産です。



## ホストファミリーと過ごした1週間

大垣市立北中学校3年 遠藤 賢志郎

私のホストファミリーは二人の姉弟とお母さんとお父さんの4人構成の家族でした。一番よく話したのは一番下のマウリス君です。彼はドイツ語、英語、少しだけ中国語、フランス語、日本語が話することができる語学が大好きなホストフレンドでした。彼とは主に英語で話しました。マウリスのお姉さんは大学生で、お母さんはオーガニックマーケットで働いており、お父さんはトラック運転手でした。お姉さんとは英語で話しましたが、お父さんとお母さんはドイツ語しか話することができなかつたため、マウリスにその都度翻訳してもらいました。お父さんはどことなく寡黙な私の叔父に似ていました。



最初の日には自分の英語が伝わっているか心配でしたが、ジェスチャーや身振り手振りを交えながら自分を表現しようと努力しました。研修2日目はホストファミリーと一日過ごす日でした。その日はベンツ博物館、テレビ塔に行きました。ベンツ博物館ではマウリスと一緒に車に関するゲームを楽しみ、仲を深めました。テレビ塔は、マウリスが高いところが苦手だったためマウリスのお父さんとタワーに行きました。はじめはすごく厳格な人に見えましたが、英語が通じないなりになんとか意思疎通をし、話をしてみると面白い人だということがわかりました。屋上からの景色は絶景でした。日本で見る景色とは全く違い、緑豊かで家々の屋根は赤色で統一されていてとても美しいと思いました。



今回の研修ではホームステイが5日間でしたが、数日もすればホストファミリーとも打ち解けることができ、一緒に笑い合える仲になりました。自分の英語力も上がってきていることが実感できたのは、自信になりました。

私はこのホストファミリーと生活した1週間を通して感じたことが1つあります。それは自分の英語が案外通じることです。初めは会話ができるか心配でしたが、自分から一生懸命に伝える気持ちを持って会話に励んだことで自分の意思や思いを相手にしっかり伝えることができました。また今回自分の目標でもあった、海外の文化に先入観を持たずチャレンジすることも、たくさん質問したり五感を使って日本とは異なる外国の文化や習慣を感じたりして、達成することができたと思います。この経験を普段の英語の授業で自信を持って英語で話すことでいかしていきたいと思います。

# ダンケシェン！心からダンケシェン！すべてにダンケシェン！

大垣市立東中学校3年 樋口 惠濃

日本を出発して14時間。真っ暗な飛行機の窓を開けて外を見ると、オレンジ色の朝日がさしていました。地上には、自然豊かな緑に囲まれた赤い屋根の家が広がっていました。すぐに分かりました。ミュンヘンに着いたのだと。一瞬にして、いろんな感情と期待が込み上げてきました。

そして9月21日、私たちの乗ったバスがケーニギン・シャルロッテ高校に到着する前から、ホストファミリーの皆さんが既に私たちを待っていてくださいました。バスを降りて緊張とワクワクで胸がいっぱいになっていた時、「メノ〜」とホストシスターのサラちゃんが迎えに来てくれました。事前にお互いの顔写真をメール交換していたので「はじめまして」というよりも再会のような気さえしました。ホストマザーのヤスミンさん、ホストファーザーのステファンさんとも挨拶を交わしたら、とてもあたたかく素敵なお家族だと伝わってきてホッとしました。この一週間お世話になるクリングラー家は、学校から車で5分程のところにあります。部屋に案内してもらっているときに、11歳の弟ヨナス君と挨拶をしました。日本から持ってきたお土産を渡しなが、いろいろなお話ができて良かったです。

ドイツに来る前に、この日はサラちゃんのお友達の誕生日パーティーがあると聞かされていました。夕方、ホストファーザーに送ってもらうと、私の想像していたお誕生会とは程遠く、『キンセアニューラ』という伝統的な盛大なパーティーでした。少女から女性へと成長していく大切な15歳、バースデーガールのお父さんが娘にハイヒールを贈るというしきたりがあるそうです。日本の立志式みたいな感じかな〜と思いながら、大勢の参加者と一緒に感動のスピーチを聞いていると、突然DJのかたが「さて、皆さん！」と言った瞬間、爆音のミュージックが流れ始め、場が一変しました。さっきまで感動で泣いていた人たちが、一斉に立ち上がり、踊り始めました。私は初めてで戸惑いましたが、サラちゃんに手を引かれ、大勢の輪の中へ。マカレナダンスや今流行りの洋楽ダンスを教わりながら、たくさんのお友達を紹介してもらって最高に楽しい夜を過ごせました。

9月22日の日曜日は、シュツットガルトで一番高いテレビ塔に連れて行ってもらいました。大垣の金生山と同じ高さ217メートルのテレビ塔から見渡した絶景は、とても澄み渡っていて今でも目に焼き付いています。そのあとは、私の大好きな恐竜博物館にも立ち寄っていただきました。夕飯は手作りピザ。作ることから食べることまで、すべての工程を楽しく教えてもらいました。



研修中、私は大事な物を失くしてしまうトラブルがありました。ホストファミリーのみなさんはじめ、

井上先生、派遣団引率者の皆さん、そして日本の家族には大変心配をかけてしまいましたが、その対応のために文字通り奔走し私を親身に支えてくださって心から感謝しています。

クリングラー家のファミリーに温かく迎え入れていただいた5日間は、人生のすべてがギュッと凝縮されたようなとても濃い時間になりました。最高の経験と愛を、本当にありがとうございました。

## ホームステイの思い出

大垣市立東中学校3年 安田 百花

私のステイ先はお父さんのペーター、お母さんのビルギット、ホストフレンドのエスケ、弟のエッノの4人家族です。エスケとは初め、Eメールでやり取りしていましたが、SNSを交換し、メッセージ以外に写真や動画を見てお互いを知っていききました。

ファミリーと対面後、お父さんのベンツに乗りました。ドイツは路面電車がよく通っていますが、凸凹がなく滑らかで、車も静かだったので、日本とは違う乗り心地にテンションが上がりました。



家に到着後、練習したドイツ語で挨拶をし、緊張しながらプレゼントを渡しました。

エッノに漫画・ワンピースのグミを渡したら、『Oh!GOMUGOMU-no-MI〜!』と喜んでくれて、私も笑顔になりました。エスケは家族や友達からフィーというニックネームで呼ばれていて、それには妖精という意味があるそうです。ジブリが好きという彼女の雰囲気、カラフルな服や靴下のコーディネートが素敵で、「まさに妖精のようだ!」と思いました。

ホームステイが始まって一番驚いたのは、食事の前に全員でお祈りをする事です。最後にアーメン、と言ってから食べ始めるのですが、私が固まっていたのに気がついて、エスケが『いただきます』と言ってきて、その意味を理解することができました。

大変ありがたいことに、お父さんが毎朝白いご飯とふりかけを用意してくれたので、日本食が恋しくはなりません。事前に「日本食もよく食べるよ」と聞いてはいましたが、慣れた手つきで白いご飯を炊いている（実際は蒸す）様子に驚きました。さらに、このお宅には『マイ箸』があり、ドイツ人はナイフとフォークしか使わないと私は思い、割り箸を用意していたので、さらに仰天!!なお、エスケは細いマカロニを上手につまんで食べていて、私より箸使いが上手でした…!

また、築120年のマンションは床がギシギシと音がしましたが、それが逆に不思議と心地良い音に感じました。内装はとてもおしゃれにリフォームされていて、キッチンもIHで使いやすく、日本の木造建物のイメージとは大違い!ドイツの気候と施工方法は、家の耐久性を高く保ち、長持ちさせる技術があるのだなと感心しました。

会話は主にドイツ語だったので、簡単な英語とボディランゲージ、翻訳アプリを使用して、四苦八苦しながらもコミュニケーションをとることができたのが嬉しかったです。最後の日の朝、お母さんが別れの言葉をかけてくれて、意味の全ては理解できなかったけれど気持ちが伝わってきて、寂しくて泣きそうになりました。そして、空港でエスケに見送ってもらった時、もっと勇気を出して話しかければよかったという気持ちがあとから湧いてきました。

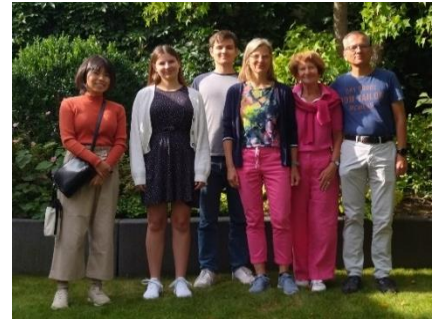
この研修を通して、自分の中の無意識の思い込みに気がつくことができたし、言葉の壁を超えることができるツールがあっても、自分自身がもっと積極的にならなければいけないことを学びました。



## 尊ぶ心は国境を越える

大垣市立南中学校 3年 吉田 杏

私のホストファミリーは、父、母、兄、姉、祖母の5人です。私には年上の兄弟がないのもあり、ホームステイは今回の研修の一番の楽しみでした。ホストファミリーは、英語と少しのドイツ語でなんとかコミュニケーションをとろうと必死だった私の言葉の一つ一つを真剣に聞いてくれました。また、私の体調を常に気遣ってくれました。その温かさには感謝しかありません。



ホームステイ2日目、朝食の前に日本からの大量のお土産をホストファミリーにプレゼントしました。ホストシスターのカーラは日本の文化が大好きで、お土産をととても喜んでくれました。祖母は折り鶴のついたイヤリングをつけて嬉しそうにはしゃいでいました。その後、私たちは、シュツットガルトのテレビタワーに行きました。そこは世界で最初に建てられたテレビタワーだそうです。展望台から見る景色は圧巻で、歴史的なシュツットガルトの街を一望できました。カーラがシュツットガルトについて丁寧にくわしく教えてくれました。シュツットガルトのことやホストファミリーのことをより知り、親しむことのできた一日でした。

日本の家庭料理も食べてもらいたいと思い、カーラと味噌汁を作りました。赤味噌を使ったので、少し濃い味でしたが、美味しそうに食べてくれたので、安心しました。

3日目くらいから他人の家という意識がなくなり、自分の家にいるような安心感がありました。布団が気持ちいい、窓から吹く風が清々しい。このような些細なことが私の心に安心感をもたせてくれました。そして何よりホストファミリーの優しさがあったからだと思います。この家でホームステイできてよかったと心から思います。



ホストハウスから駅までの道のりは長く、傾きの大きな坂道でした。そこを車ではなく、毎日歩きました。体にもよく、地球にも優しいので、すごくいいことだなと思いました。また、ほとんどの一軒家の屋根に太陽光パネルがついていたことが、印象に残っています。

私が最もドイツで印象に残ったことは、街並みでもなく、食べ物でもありません。街を行き交う人々を見て、肌や目、髪の色、宗教が異なる人達が楽しそうに話していたことです。ドイツは移民してきた人が多く住んでいるそうです。日本の学校では、外国から来た人と関わる機会が少なく、あまり見られない光景です。関わるがあっても、気後れしてしまう人がほとんどでしょう。それぞれの個性や文化、宗教を尊重して共生している姿を目の当たりにして感銘を受けました。

ドイツで、日本にはない理想の姿を見つけることができました。今回の派遣で私の価値観が大きく変わり、視野が広がりました。

【第13回 大垣市中学生ドイツ・シュツットガルト市研修派遣報告書】

編集 公益財団法人 大垣国際交流協会 大垣市室本町5丁目51番地 スイトピアセンター学習館2階

TEL : 0584-82-2311 URL : <https://www.i-oiea.jp> 発行 令和6年(2024年)11月